

幼友達 ゴロチャン

さいたま市

安藤三郎（東本町三丁目出身）

妙高が見えて来ると懐に抱かれたような気持ちになる。南葉・朝日・金谷の山々を車窓から眺めるのは幼い昔が蘇る。懐かしく思われるのは山河だけでない。そこを走り回った幼友達にも会えるのである。

「五郎さんが勘弁してくれないと云って手錠を掛けた」と教えられたのは、還暦を過ぎての頃だった。戦後間もない時の事だ。それから四十年も経過して居る。知り合いの人に手錠を掛ける辛い職責を果たしたゴロチャンの事が、長く伝えられているのは彼の優しさと誠実さが人々の心を打ったからであろう。

家も近く親も一緒に遊び回った仲間だったが、兵隊・就職と高田を離れていた。再会は古希を迎えた時の小学校の同級会だった。懐かしかった。話は走り回った頃の時か

ら始まったが、手錠の一件から「オマンを以降・温情溢れる警官・の称号を以って呼ぶ事にする」と云うと、それは勘弁してくれ実はこれこれの悪戯をした。交番勤務の時「オマンがああ悪戯鬼の五郎かね。良く変わったね」とあるお婆さんに冷やかされたと云う。それならオマンは鬼子母神様だ。益々偉いんだとなった。仏様に成つての一日十善より生身の一日一善が勝ると経文にあるから、お互い行いを正して長生きしようと大笑いになった。

広島原爆追悼式の日、彼から電話があった。当時彼は太竹潜水学校で訓練中だった。原爆の二日後の温習時間と呼び出され、出撃の為、髪と爪を提出せよと命令されたと言う。提出してから土手に腰掛け生きて帰れぬ事を覚悟したが、両

親・兄弟を偲んで別れを告げたら涙が止まらなかつたと云う。一瞬夢を見たのだろうか、なんとそこは安養寺の階段だったという。子供の頃の遊び場だったからであろうか。其の翌日下宿を訪ねたら広島島の女学校へ行っている娘さんが帰ってきていて寝ていたが、常人と変わらぬ様子だったのが又二日ほどして訪ねたら亡くなって居たと云う。

十五日は空襲を受けて多数の死傷者が出た岩国駅へ行つて、死体を山のように積み上げ焼却した。そしてそこで終戦の詔勅を聞いたと云う。復員命令が出たのは何時か忘れたが列車は無しで、とにかく北を目指せばと三十 km 程離れた廿日市迄歩き、そこで列車に乗り大阪へ着いた。列車待ちして乾パンを食べていたら、そばで品の良い紳士がジツと飢えに耐えておいでだったので戦友と少しずつ出合つて差し上げた。大阪から直江津迄は機関車の先端の棒につかまつて来た。トンネルは暗く恐かつたから戦友と声掛け励ましあつて来たと言う。高田では駅前の家が疎開で取り壊されたとは知らなかつたから、高田も空襲を受けたかと思つたと云う。

あの頃は若い者は人生二十五年と覚悟して居たなあと思つた。それが其の三倍も生きてこれたのは有難い事である。彼



サロンでの安藤さん

との会話は全くの或は意識して高田弁でやっている。裸で語り合える故郷は懐かしい。